



18
4424
5





27

◇自己中心明治文壇史◇七

海は遠し

江見水蔭

西刀使ひ分け

明治二十五年の春の上

二重性格の著述は、著述の生かす暴露

しん。一方は、~~特好~~熱友の~~志士~~氣風。一方は

友社員の文士氣分。其中間を自分は縫ひ歩い

ト ↓

とは纏らぶかつん。

今の文工新聞小説を一日三四五口書く。

は何んでもない事であらうけれど、昔時代の

は(海山)西段亭は別格が(唯一ツ)の新聞小説

でも持て餘して、体裁勝であるものを有つた。

その又体裁が当り前として、讀者がより寛容さ

せてゐるものも有つた。

此際自分には山陽新報の探偵小説の新

篇朝船を纏めて執筆し、又東京中野

新聞の時代小説朝嵐情を取らうといふのを

A 10 20 青山三河屋書店製

寄稿し出した。(世間は、国光社から発行の

精華といふ青年向の雑誌を、鈴木芳と

いふ立志小説を送つてゐた)

江さんは新聞をニツ書いてゐる。といふ事は、

仲間内で評判された位、その奮闘をつげん

のこ有つた。

山陽新報に自分が小説を書き始めれば、

故郷の人々は、鏡馬さんの息子の小説を書

くといふ。その時、~~その時、~~多量の侮

辱を食んでゐる。で有つた。自分の父は鏡馬

No.

111

72

誤解で有つたのである
 郷里の友人として、他は野間五造がある。自
 分より一ツの年長で、隣家の古田家から野間家
 へ嫁入りした人の子であるが、幼少の間から親
 しみのつた野間が社で上京したのは自分の
 濱町の家である。有つた。
 それから早稲田へ通学する様になり、坪谷
 水我と知り合つた関係で、博多館の諸雑誌
 へ吉備ツ子の名で寄稿するようになった。自分の
 種不交遊として保存するのは友人ばかりだ。

No.

此時の石川の弟で、~~屋場~~屋場、水、角田浩
 と数客の二人が、石川の友人であるといふ事
 を知つた。
 自分は少年時代の同山を出たので、郷里の
 友人は甚だ稀なもので有つた。石川は二三度
 訪ねて来たが、~~今はお人~~鹿子木益郎画伯の実兄
 宇治益治郎（同郷）として同じ稲垣塾友。少年
 時代の同山山の鋳術師範阿部先生の門下先輩
 で有つた。この事を、自分が悪口を云つたとい
 ふので、感情を害して来たといふ成つた。これは

A 10 20 青山三河屋紙店製

77

大入賞

明治三十二年の春の下

石橋忠崇が新婚の披露を、三月三日の雛祭
 に挙行する。就ては、是非一芝居打たうとい
 ふ事已成つた。その中で、寺熊の宴會とい
 佐藤の秋留多會といふのは、顔さへ揃へば即席
 で芝居の真似(芝居茶番的?)をしてるん
 だ。今度併し、前年の文士劇の次いで
 大掛りでやる事さ、ノボせれりて有つた。

A 10 20 青山三河川紙店製

題名は一番目

関根徳太郎

中幕

色懺悔

二番目

霜夜鐘

大切

村上

念

組

合せて有つた。

色懺悔

山崎

山崎茶葉の家へ持て行く

好評で有つた。小説と自分とを

戦場の巻を一章。書が紅葉が女序幕、小説

には無い出陣の巻と、一章書き加へて

それと白濱しやと、いふので有つた。(紅葉の

自作自演は珍らしい事では有つた。は事は昔で

文藝俱樂部の紅葉の脚本と題して、自分は発表

No.

10

赤く染め出して、自分も食を揃つたので、他
 より早く帰宅したので、非常な烈風で歩行が
 困つた。明くる朝起きて湯へ行くと、三助が
 昨夜の神田の火事で、衣が焼けたるすす
 と考へて居た。この猿樂町の火で、何十
 戸と引火焼失で有つた。もうこんな大火は以
 後有るまいかと、其時までは思ひ合つた位。
 花柳の家は五十箱荷のある、勤業場の後の方
 で、無事全焼した。佐藤の母の帰つ
 て間もないので、折詰を提げ、傳馬場町の

No.

111

と物に成つた。有つたが、能役者と画家と
 の三人揃りの顔といふのは、空前絶後といふ
 べきで有つた。(其の幕開きの述べて、兄弟の
 沸いたのは勿論で有つた)
 四月に入ると、元禄人形といふのを、金港
 堂發行の「續」の山といふ不定期雑誌(後
 切小説の編輯録)に載せられた。以時、稿料
 一枚四十銭に上つた。
 同月九日、佐藤萬鶴の結婚披露に有つて、社
 中は皆招待された。以席上、眉山酒乱、理由

A 10 20 青山三河屋紙店製

11

おみちの家の(遊)難しむとく(逸)話を留めん

ので有らん

自分は(先祖)代々の刀剣類や礼類、例の尾谷へ

入管とるれりぞ、何れより先きとせ所へ

教付けれ、(實)物一切焼き申さすん

立板を見て安心しん

書がこれと誰か不知庵の葉つんと見えん

国民新聞に、某文士は神田の大火は、文士の

若松依田先生の火へは見舞ふ行の事。いさふ

り(實)家へ教付けれと、名は刺さるが自分を攻

A 10 20 青山三河屋紙店製

撃しん。それは当り前の事ぞ、自分は依田
先生より(先祖)代々の刀の方が、どの位
大事か知れふかつれりん

この大火は杉浦先生を取つて、大(打)撃で有つ

ん。東京英語学校、(教)業社書店、熊田(出)版所の三箇所

が焼(焼)きしれりぞ有らん。先生の所友人(達)で

政治(主)義を反抗し、(国)家(主)義を確立するに

は、(教)育(機)関として、先づ(英)語(学)校を(出)版(機)関

として、(教)業社(名)が熊田(出)版所を設けて、それ(業)

場(業)を志す(業)が(業)と(出)版(機)関を有つたの

No. _____

111

1 ↓ ↓

てあるより、は、賣つた方が好いと成つて、照文
 堂といふ筆屋、親族同様、能く倒を見てる
 て見れば、女師の依頼、毒掃つたのた。
 地所ぐる、千三百三十円といふので有つた。
 この金は例、如く叔父水原が保管といふ事
 で、殆ど自分は、持合者指りを受けてるの
 で有つた。
 大石は、瀧つてるれ紀葉は、どういふ氣分の
 下か、横寺町の度で、撃鎧をやり出した。社中
 は一、二、三、ふく、雷、同、し、ん。社中、は、一、人、が、何、か

No.

生まん、幽霊

日明は二十五、五、の夜のお入り

園山の家が賣れた。地百は二百坪。家は
 池田新太郎少将入国以来、ふりで、市の鉋を用
ひたり、時代の建築の多く、柱や板たぶり
は手の痕が歴々と見えて、それは人の顔が
写るのと煤で黒光がしてるので有つた。
 屋根は茅葺と瓦葺と半々で有つた。何分旧
 家ぶりで、今の入んやうが、悪かつたので、持つ

A 10 20 青山三河屋紙店製

14 ←

を張ることも他は大概その如く
議論無くて直往(れ)

たが、紅葉は甚だ下午で有つた。
風谷が一書で、その小説の序文は自分で、小説、虚

世他は鈍業のまゝ。花瘦と思案に至つて
は近視眼同士で、按摩の調練よろしくといふ

評で有つた。これは併し長つゞきがしつゝ
れ。

六月~~書~~七月へ掛りて、病氣勝て、
痛んで、初と碌々眠れぬといつた。それと愛宕

A 10 20 青山三河屋紙店製

下の東京病院に入院する事と成つた。それ

は金杉英五郎国手(赤松博士で居る)といふ

耳鼻咽喉科を研究して初めて帰朝した

時で、事柄は斯くの専門はよく、東

京病院(高木兼寛国手院長)に在る

留齋で居る)といふ)の如く有する唯一の誇り

有つたといふ。それは七月十日で有る。

金杉国手の助手の今(佐藤信郎博士で、

名乗る)と見ると寺崎廣業通伯の弟といふの

か知れぬ。その時、大角といふ、

この人は小説家である。其の心は小説を専ら

七月福山人の事と有る

No.

111

15

入院患者中、^{相場王}新島の濱野將軍(茂)の馬車
 で轢かれて片足を失った人であった。それ
 の情状者が二人擔ぎ込んで運んだ。男は助
 け、女は死んだ。^{外耳炎}
 自分は切腹した。~~~~~~~~~
 場所、場所、^{見舞い}中、能く穿つて見ると、
 二十九日の夜、もう大分快く成つてゐたの
 で、小波紅葉の先登りをする後、自分は

No.

111

べ病院へ、矢張り自分の病を尋ねて通つて来
 る人、^長舞臺へ紳士が、自分を誘ひ掛けた。
 ところが三品薩摩で有つた。
~~~~~~~~~  
 特別室に絶世の佳人が入つて来て、問題に成  
 つた。それは松方老伯(末伯)の<sup>女</sup>有つたの  
 醫娘といふ事がある。  
 その当時の入院患者として、来訪者と通信の  
 多いのは、自分が一番といふので、大評判を成

A 10 20 青山三河屋紙店製



16

八月一日は入院した。その病後の静養、  
 四日頃から小波風谷と其の箱根塔の隣へ轉地。  
 数日後、單獨で、声の揚吉田家へ移った。自動  
 車どころか、人力車も使えず、一歩の行いず。後  
 は山留るゆりれるの有り。  
 この病は島地黙雷舒びる。尊大ぶるはさ  
 んで有る。同舟で声の湖、おんが、無諦  
 知悉は、自分の何者かの命をふりつる。  
 2年。

同田舎心も同宿し。昔は野ヶ嶽へ登山す  
 学生時代の同村司(故は...)  
 (を) (車) (を)

No.

病院を脱して、乳養館の事午の、後へ  
 2、茶室へと行った。  
 その前、乳養と小波とは打合せを置いて、  
 館へ向い。江見は東京病院で死んだ。  
 今夜死影を引取るが。と後舎んで話。  
 2年。白地の浴衣を着て自分の藤木立の  
 暗闇へ入来つるのを見て、女事は出立と  
 間事へ。悲鳴を擧げを北へ行った。其  
 結果、昨夜は甚だ不評判で、お酌は金持ちの者  
 殆ど無いの有り。

A 10 20 青山三河屋紙店製

17

毛頭と持んふのつん。創作と事務との自己の  
 自由な舞台を得た。いかに有つん。  
 それに併<sup>い</sup>利益を得る。ふんどとつん考へは  
 を発表する機関も、他より何等制肘されざる  
 樹<sup>り</sup>下<sup>り</sup>。それは理想派とこそ、散文詩的<sup>てい</sup>短<sup>たん</sup>篇<sup>へん</sup>  
 生活。その間は自分は個人雑誌発行の計畫を  
 ねらめての病院生活。それより長い間の帰治

No.

初陣の小櫻絨

明治三十五年の秋

といふ。この頃箱根に漸く電燈が引かれた。塔の  
 下<sup>し</sup>信<sup>しん</sup>谷<sup>たに</sup>といふ。期間按<sup>あ</sup>替<sup>か</sup>の。電氣の点<sup>ち</sup>いは  
 損<sup>こ</sup>のいふ。といふ。結<sup>むす</sup>のいふ。節<sup>ふし</sup>の替<sup>か</sup>へ歌<sup>うた</sup>を  
 作<sup>つく</sup>つん。鈴<sup>すず</sup>木の主人善<sup>ぜん</sup>在<sup>ざい</sup>衛<sup>ゑい</sup>門<sup>もん</sup>の。比<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>れ  
 事<sup>こと</sup>が有<sup>あ</sup>つん。今<sup>いま</sup>はどち<sup>どち</sup>の<sup>の</sup>故<sup>こ</sup>人<sup>にん</sup>の。廿<sup>に</sup>席<sup>せき</sup>の  
 田<sup>た</sup>中<sup>ちゆう</sup>隆<sup>りゆう</sup>三<sup>さん</sup>が有<sup>あ</sup>つん。後<sup>のち</sup>人<sup>にん</sup>時<sup>じ</sup>代<sup>だい</sup>の  
 九月二十五日は下山。廿<sup>に</sup>間<sup>かん</sup>の一度<sup>いちど</sup>帰<sup>かへ</sup>京<sup>きやう</sup>  
 した事<sup>こと</sup>も有<sup>あ</sup>つん。中<sup>ちゆう</sup>央<sup>おう</sup>新<sup>しん</sup>聞<sup>ぶん</sup>の依<sup>よ</sup>頼<sup>らい</sup>を。命<sup>いのち</sup>不<sup>ふ</sup>知<sup>ち</sup>  
 といふ。依<sup>よ</sup>客<sup>かく</sup>小<sup>せう</sup>説<sup>せつ</sup>を書<sup>か</sup>き出<sup>だ</sup>した。

A 10 20 青山三河屋紙店製

111



197

のが、先づ禮<sup>①</sup>であり又例<sup>②</sup>でも有つた。か、  
 實はそれはゆゑ蒙りたつた。  
 思想——殊々詩想に於て、所謂硯友社風な  
 合はふかつたのが、文章に凝<sup>③</sup>つた、字句を  
 誇<sup>④</sup>つた、そんな末技を失<sup>⑤</sup>つたと云ひ勝<sup>⑥</sup>の  
 紅葉其他下對して、自分は同意せぬかいつん  
 のが、この報<sup>⑦</sup>は、高瀬文圃の「問答」が  
 不<sup>⑧</sup>をさしてゐる。川上眉山も亦その餘  
 響は受けとる。

けん、硯友社は文学運動の爲の  
 團結  
 No.

一日の長者たる自分の責任で有るもの考へて、  
 個人雜誌の一部分を、新進の爲に割く  
 とする事を計畫に入れたので有つた。  
 他より優劣を以て、自己を守護して有難する。  
 とする意味で、音神は城守の因<sup>ちよ</sup>んが名を附  
 け様と思つたが、猶うを縮少として、身を固  
 める武具に比して、著者の花々しきもの句  
 句を、小櫻<sup>ちよ</sup>織と命名した。  
 併し自分の雜誌を出すと成ると、当然硯友  
 社の先輩或は世間下ると、寄稿を依頼する

A 10 20 奇山三河屋紙店製

202

おく、社会的機関——平ツルく云へる諸君  
 間——進んで兄弟関係——で有つた<sup>12</sup>、  
 自分の叛逆と就ては、極めを寛大で有つて。  
 小櫻織の表紙の字を紅葉は書いて呉れた  
 上、教部の雑誌を買つて呉れた。又十月  
 二日の祝友社の秋季大會より相寄る、自分は  
 出席して、皆と一緒茶番的芝居を演じると  
 してゐた。  
 雑誌発行の事務は就ては、花袋が非常の骨  
 を折つて呉れ、信務を大分助けて呉れた。そ

出版届けその他で後所通りふいて  
 A1020 香山三河屋書店製

れ<sup>其</sup>友人たる右田玄綱(玉茗堂主人)  
 土持綱字(聶人)とを連名で来ふといふ。  
<sup>然る</sup>、新運動の最中、自分の従兄の  
 子<sup>で</sup>、東京の奉公の母が、胃潰瘍で  
 事業ぶが、已もを得ず引取らふけり成る  
 ぶといふ。  
 一方は、中央新聞の通信小説を書きつ  
 けてゐる。小櫻織の初号の編輯は非常の  
 骨が折れて、十月二十二日の成功は、徹夜を  
 てるが、其の悦度と同時に、  
 最後の原稿

No. \_\_\_\_\_

21

区内に有つた、郵便局の錯誤さうで困つ  
 れので、  
 区内の廣告料が四十行で二円四十銭で有  
 る。  
 小樽紙は小形雑誌として、除無し棒組で  
 三十七字十二行の五十頁、総ルビ付、  
 再版費千部、  
 後黄巻の拂金、二十円七十五銭で有つた。  
 小樽紙の五銭の定価、  
 小樽紙を高くしたるは、自分俵に積んで、  
 東京等と其他に配達した事も有つた。

No.

病人は息を引取つた。  
 その日、それを記念する為、小説の流水  
 後の流水記と改め、文藝俱樂部で出た。  
 の主人公の姓、死者の姓と同じ、牧野さん。  
 其さん、あり世の、守護してあつた。小樽  
 織が成長するやうに。  
 櫻屋は自分は泣きながら、記者に依頼した  
 ので有つた。  
 示名を自分の姓、と頭字を取ると、江水社  
 とし、  
 生憎同名のシヤボン、  
 A 10 20 青山三河屋書店製



237

小説七国論

明治二十五年の冬

小櫻織<sup>ら</sup>を出すと前後は、山岸荷葉が能く  
 遊びまわるとある。これは紅葉柴井で、荷葉の  
 號も其地から出たのであろうが、その友人の  
 武田櫻桃（今の菅塘）山村水廓の三人で、詞  
 海とよぶ同人雜誌を出してある。それへ  
 自分は補綴として寄稿した。

A 10 20 香山三河屋紙店製

といふのが能くある。このやうに大分日本を  
 借りて見れば、このやうに戸隠の<sup>の</sup>最後  
 まで遺るるものも有る。

小波が京都の日の出新聞に招聘されて  
 行く事になったので、その送別會を十一月三  
 日、杉浦先生の福好塾で開く事になり、自  
 分も出席した。  
 すうと落合謙太郎（今の中本利大使）が立  
 つて、送別之辭を述べると、今の小説は、  
 いれど又男女の痴情を記述して、人心を知

No. \_\_\_\_\_





25 ↓

明治二十六年の一月元旦。自分は年始廻りの為、傳を走り、神田錦町の門をまわると、向ふに、綿服、小倉の袴で、素より外倉を歩く、村崗の下駄を穿いた一書を、悄然と、  
 来樹のりを見せしむ。それは田山花袋で、  
 有る。

花見の旅

明治二十六年の春

No. \_\_\_\_\_

陰とく、顔筋で、非常の盛會で有る。  
 小櫻鐵山二号報軍の地、經世とく、國光社發行の新聞、  
 山岸の鋪祭、は又招り、  
 今の甲十郎の唄で、今輯、  
 びんぶどは、大膽、  
 初段、  
 龍走で、  
 二百四十円三十銭

A 10 20 青山三河屋紙店製

26

と言つて新年の思詞も求べて好いか知れぬ。  
 と言ふのは、年末に於て、<sup>日</sup>讀亭の校正部の  
 某(編輯と校正)今程確然としてゐるから、  
 〇〇自分の書を寄せて、新年の紙を掲  
 載する小説を求めぬ。有つて。  
 それで自分は花袋を認めし。花袋は喜ん  
 で、山家水山といふのを送つたのを有つて。  
 それが早速新年初摺の豫告も出た。花袋は  
 勿論自分も喜んでゐる。有つて。

豫告中

No.







探偵小説流行

明治二十六年の冬  
秋冬

30と

東京からは野口雨齋が来合せてゐる。京都側  
からは堀江松茸、黒田玄外、宮嶋春齋、中川  
霞城等が、總じて百餘名。甚し関西で文壇の  
會を催したのは、是が嚆矢で有つた。  
けつは西段城(後の四明)が一句。  
文学の赤眼の如く東山  
全く関西の文学は眠つてゐるが有つた。  
この旅行は、薩摩の<sup>の</sup>花柳、<sup>の</sup>ソリス舞の  
兵子帯、大黒帽、日光下駄の揃ひとくし申し  
合せて、全然書生風で有つた。(けつ時)

A 10 20 青山三河屋書店製

書生羽織と袴と、非常な長い丈りを着るの  
流行つてゐた。

探偵小説流行。黒岩除香の譯が、非常な  
勢いで流行してゐた。それと續いて水田南陽

外史(学雄)の中央で盛んな事だ。  
探偵小説の構行としては、純文藝の

か旁の悪いです。一ツ本を利するは  
を以てすしやうで、探偵小説文庫を出して

字價でドシ、賣るを見せよう  
春陽堂の主張で、それと探偵の如く持上

んで来た。

それで紅葉は早速社中を法北隊を募集して

此が、思案、花燈、風俗と云ふ連中が雨で

庶務した。自分も加はりた。つら。空引と云ふで

では中も間も合はぬ。小曾根鈴熊とい

ふ人。抄。それを書き直して。四本指

と。船中の殺人。と云ふ。二篇。

わけ。僅少の梅料の中。小曾根

翻譯料を拂つた。自分の収入はアマ

り。僅少。今度の創作で。女の屍骸

A 10 20 青山三河屋紙店製

といふのを書きおどした。

譯者。五。燈籠。と云ふ。婦人を主人

公。小説を書いた。時。の筆。市。謙

吉先生。紅葉へ。楽。の。小説を

発表したのは困る。と云ふ意味。今紙を寄

せり。

それを紅葉。自分。示した。噂。真

文学が一般。認識。事。前途。を

思はず。はる。お。つん。

持。館。諸作家の。短篇。集録。明。治

了。の。と

No.



文庫といふのが刊行される。その第三篇は  
自分の短篇十四種をまとめたもの。

この他に、山陽新聞、田舎原氏を

経世新聞、本陣の森を

近江新聞、一夜の

を、其他のまが太分書いた。

けれども、女年表は甚かに悲愴で、大海

の東多を物言ひ、箱根落し、事、古陽

の書い、合の譜、と、発表の

で、の、客す。



